

琉球方言における動詞のテンス・アスペクトは どのように記述されたか

津波古 敏 子

§ 1. この論文の課題は、これまで琉球方言の動詞の研究においてすすめられてきたテンス・アスペクトについて検討することである。そのまえに、琉球方言における動詞の文法研究のあゆみをかんたんにみておきたい。琉球方言の文法の研究は、19世紀の後半に、外国の人たちによって幕があげられた。その外国人の手になる文法書がふたつある。ひとつは、ハンガリーうまれの宣教師で、医者でもあった Bernard Jean Bettelheim によってかかれた “Elements or Contributions toward a Loochooan & Japanese Grammar” (1849)¹⁾ で、これは琉球の言語に関する、最初の国際的な文献といわれている。もうひとつは、英国うまれの言語学者 Basil Hall Chamberlain によってかかれた “Essay in Aid of a Grammar and Dictionary of the Luchuan Language” (1895) である。ベッテルハイムとチェンバレンが対象にしているのは「琉球語」の代表である首里方言で、彼らは、ヨーロッパの伝統的な文法のたちばにたちつつも、たえず「日本語」と比較しながらその記述をすすめている。動詞のばあい、整理のし方は多少ちがっているが、ふたりとも英語の動詞にあてはめながら、文法的な意味によって活用形を整理している。

時代がくだって20世紀にはいると、学校文法（橋本文法）のたちばにたった研究があらわれる。このたちばにたっただけかかれたものには、宮良当壮の『八重山語彙（語法の項）』（1930）と仲宗根政善の「加行変格『来る』の国頭方言の活用について」（『南島論叢』1937）および金城朝永の『那覇方言概説』（1944）などがある。動詞のまとめ方についていえば、彼らは動詞の文法的なかたちを「国語」動詞にあてはめながら整理をするという方法をとっている。テンス・アスペクトの観点からいえば、おなじ学校文法のたちばにたっただけはいるが、宮良・仲宗根が方言の動詞のかたちを「国語」動詞のそれにそのままあてはめて、

語尾の部分を「時の助動詞」とみているのに対して、金城のほうは、kacaN, kacutaNの語尾は、宮良・仲宗根とおなじようにあつかいながら、kace:Nのばあいには、標準語とはあまりにもちがすぎる語尾を「時の助動詞」とすることに躊躇していて、「anとtanは別としても、e:n以下を強ひて時の助動詞として抽出するよりも、これらを単に一種の複語尾として取扱ふのが、無難であるかも知れない」と、のべている。学校文法へのあてはめを批判して、構造主義のたちばから首里方言の動詞の活用形を整理しているのが、服部四郎の「琉球語（文法の項）」（市河・服部編『世界言語概説』下 1955）である。この論文では、共通の語幹をもつかたちをひとつのグループにまとめるという方法がとられていて、動詞の活用形はもっぱら形式の側面から整理されている。ここでは形式の面に視点がそそがれていて、動詞の文法的な体系は記述の対象になっていない。学校文法へのあてはめを批判するたちばにたってはいるが、単語の形式と意味とをきりはなしてあつかうという点で、服部の方法と学校文法のたちばにたつ宮良・金城の方法との根はひとつである。服部論文の問題点については、すでに宮島達夫の「文法体系について－方言文法のために－」（『国語学』25, 1956）と鈴木重幸の「首里方言の動詞のいいきりの形」（『国語学』41, 1960）に指摘されているので、ここではふれない。服部論文のあとにでてきたものに仲宗根政善の「沖縄方言の動詞の活用」（『国語学』41, 1960）がある。この論文は今帰仁与那嶺方言の動詞の活用形についてのべるとともに沖縄本島の北部2地点と南部4地点における方言の活用形を比較しながら地方的な差をうきばりにしている。活用形の一覧表では動詞の文法的なかたちを「通時論に『国語』と比較対照」して細分化し、形成過程の視点から琉球方言の動詞と標準語の動詞との、かたちのちがいをみていこうとしている。この論文では、共通の語幹をもとに整理するという、服部の方法をもちいてはいるが、haQcaN「かいた」、haQceN「かいてある」、haQcuN「かいている」……の語尾を、学校文法のように、「時の助動詞」としてきりはなさないでひとつの文法的なかたちとしてあつかっていて、その点は服部とも学校文法（橋本文法）ともことなっている。

1960年代には形態論の観点から動詞の活用をまとめた、ふたつの論文がでてくる。そのひとつは、服部論文に対する批判から出発しながら、首里方言にお

ける動詞を体系的にとらえようとするたちばかりかかれた、鈴木重幸の「首里方言の動詞のいきりの形」(『国語学』41, 1960)である。この論文では動詞の活用形を、「一定の文法的な意味(機能)と一定の文法的な形が表している『意味と形との統一体』である」とみて、ひとつのかたちを形態論的な、カテゴリー的な意味がいくつもかさなりあった複合体としてとらえている。ここでは終止形がもっている形態論的なカテゴリーとしてテンス・アスペクト・モード・みとめ方・ていねいさをとりだして活用の体系を説明している。形態論的な観点からまとめた、もうひとつの論文は上村幸雄の「首里方言の文法」(『沖縄語辞典』の解説編 1963)である。この論文で上村は首里方言の動詞の文法的なかたちをすべてとりだして、その一覧を服部とおなじ方法で整理したうえで、その形態論的な構造を鈴木とおなじ方法をつかってまとめている。鈴木論文と上村論文は、形態論的なカテゴリーによって動詞の活用の体系をさしだしたことで、その過程でテンスとアスペクトとを区別してアスペクトの体系をしめしたということとで、琉球方言の動詞の研究においてひとつのエポックをつくっている。

琉球方言における動詞のアスペクトの研究も、標準語のアスペクト研究の影響のそとにすることはできなかった。標準語の研究では、動詞のアスペクトとテンスとが区別されはじめるようになるのは1900年代前半の、佐久間鼎、宮田幸一の文法研究からのようである。1900年代の後半に、金田一春彦、鈴木重幸らの、テンス・アスペクトを対象にした論文がでてきて、そのあとに奥田靖雄のアスペクト論があらわれる。標準語のテンス・アスペクト論の研究は、奥田靖雄の論文「アスペクトの研究をめぐる」(1977, 1978)を契機にしてはいやいテンポですすんでいくのだが、鈴木重幸 1993²⁾は研究のふかまりをつぎのようにのべている。「日本語のテンス・アスペクト論は77年、78年の奥田靖雄の論文『アスペクトの研究をめぐる』によって形態論的なカテゴリーとしてのアスペクトの基本的なわくぐみがあたえられ、日本語のアスペクト研究はあたらしい段階にはいった。その後、奥田は1988年以前に『時間の表現(1)(2)』(『教育国語』94, 95)をかいて、アスペクトの機能的な本質をあきらかにしている。1993年には『動詞の終止形』の(その1)(『教育国語』2・9)で動詞の

終止形における、形態論的なカテゴリーとしてのアスペクト、テンス、ムードの概念規定をあたえ」た。奥田からあとの、標準語のテンス・アスペクト論の研究を、鈴木は「奥田的段階」とよんでいる。1900年代後半の研究成果は琉球方言の研究にもとりいれられた。金田一、鈴木らの段階を、奥田 1977 では「金田一的段階」とよんでいるのだが、鈴木・上村の論文は金田一的段階でなされた研究として位置づけていいだろう。

テンス・アスペクトの観点から、1800年代後半以降の琉球方言の研究を区分するとすれば、ふたつの時期にわけることができるだろう。前期はベッテルハイム・チェンバレンから金城朝永までの時代で、文法的なカテゴリーとしてのアスペクトの概念がまだない時期である。後期は上村幸雄・鈴木重幸からあとの時代で、テンスとアスペクトとを区別して、それらを文法的なカテゴリーとしてとりだした時代である。琉球方言のアスペクトの研究はここからはじまっているとみることができるが、テンスの研究はまだ手つかずのままである。

これからわたしがこの論文でおこなう琉球方言のテンス・アスペクトの検討は、奥田の用語のもとに、奥田のテンス・アスペクト論に依拠している。奥田の理論のたすけをかりているとはいっても、それはわたしが理解しえたレベルのものであるということはいうまでもない。奥田の理論に対するわたしの理解がじゅうぶんでないにもかかわらず、あえてわたしがこのテーマをとりあげるのは、ひとつには、きえつつある琉球方言を研究する者にとっては、この方言のテンス・アスペクトの基本的な意味をおたがいに確認しあうことが必要である、と考えるからである。ふたつめには、そのことなしには琉球方言の比較・歴史的な研究はなりたたない、と考えるからである。(なお、この原稿では、「標準語」という用語を、方言に対立し、文章語をもった現代日本の公的な言語、という概念のもとに使用している。ときに「標準語」を引用文献にしたがって「日本語」「国語」とよぶこともある)

前期(1) 1800年代

§ 2. 琉球方言ではアスペクチュアルな意味をあらわす文法的なかたちがいくつかあるのだが、この論文では基本的なアスペクトのかたちだけをとりあげ、

これらのかたちがあらわす基本的な意味を検討していくことにする。したがってここであつかう文法的なかたちは、1800年代から現在までに使用されたもので、チェンバレンが対象にした首里方言でいえば、tujuN「とる」、tutaN「とった」、tujutaN「トリヨッタ」、tuto:N「とっている」、tuto:taN「とっていた」、tute:N「トッテアル」、tute:taN「トッテアッタ」ということになる。これまでのわたしの調査によれば、これらのほかには、この期間に首里方言でもちいられた、基本的なアスペクトのかたちはあらわれてこない。

琉球方言のテンス・アスペクトのかたちのあつかい方を歴史的にみるとすれば、まずはじめにベッテルハイムとチェンバレンのばあいをあげなければならぬだろう。彼らがまとめた一覧表のなかから、ここで検討の対象にしているかたちをぬきだすと、つぎのようになる（以下に引用する語形の表記は原文のままである）。

ベッテルハイムのばあい

I n d i c a t i v e ・ A f f i r m a t i v e

ナル naru 'to be, can be, may be'

Present nayung 'it is, becomes, may be'

past natang 'has become'

nayutang 'is done'

naténg

natóng

Future narandi shung

yagati nayung

ツクル tskuru, 'to make'

Tskoyung, 'make'

Tskotang, tskoténg, 'made'

Tskotetang (tskoti atang)

Tskotótang (tskoti wutang) } 'had made'

Tskorandi shung, 'shall make'

Tskorandi shang, 'was about to make'

Tskorandi shutang, 'had been about to make'

チェンバレンのばあい

Tuyung "to take" (Jap. toru)

P o s i t i v e v o i c e . affirmative • Conclusive

Certain Present or Future. tuyung Perfect. tutóng

Imperfect. tutang Pluperfect. tutôtang

ベッテルハイムの調査では、Tskoyung のところで nayutang, natóng に対応するかたちがおちていて、チェンバレンの調査では、ベッテルハイムがあげている nayutang, naténg に対応するかたちがおちている。上にあげたかたちは、どちらのばあいも直説法・肯定³⁾ということのひとつのグループにまとめられ、テンスによって他のかたちから区別されている。ベッテルハイムのいう未来形は基本的なアスペクトのかたちではないので、ここではとりあげないことにする。ベッテルハイムは、動詞の基本形 nayung, Tskoyung などを「現在」に、そのほかのかたちを「過去」に配置している。それに対してチェンバレンは、ベッテルハイムが「現在」とみたかたちを「現在・未来」ととらえ、ベッテルハイムが「過去」にひとくくりにしたかたちを imperfect, perfect, pluperfect のみにつにわけている。しかし彼はこれらを "three past tenses" とよんでいる。彼は、これらのかたちのちがいをテンスの側面だけでとらえて、アスペクトのちがいとしてはとらえなかった。いいかえれば、テンスとアスペクトとを区別することをしなかった。ベッテルハイムにもおなじことがいえる。

ここで、首里方言の動詞の文法的なかたちに対する、チェンバレンの基本的な認識にあやまりがあることを指摘しておかなければならない。彼は、テンスについて「意味に関するかぎり、琉球語の imperfect, perfect, pluperfect は英語のみつつの過去テンスとほとんど正確な対応をしめす」とのべている。しかしそこで彼がそれぞれにあてはめた、首里方言のかたちは実際の使用とはこと

なっている。つまり彼は tutang を imperfect とし、tutóng を perfect、tutótang を pluperfect としているのだが、首里方言の使用においてこれらのかたちはそのような意味をあらわさない。tutang についていえば、首里方言におけるこのかたちがあらわす意味は perfective であって、imperfect ではない。なぜ彼は imperfect とみたのだろうか。彼は、このかたちのなりたちを動名詞に ang 「ある」がくっついたものであると説明している。おそらく、彼は ang の語彙的な意味に注目し、動作が終了していないとみて、imperfect としたのだろう。そのようにかんがえないと、この疑問はとけない。tutóng と tutótang とについていえば、首里方言におけるこのかたちは imperfect の非過去と過去をあらわすのだが、彼は、tutóng を perfect ととらえ、tutótang を pluperfect ととらえている。なぜ彼はこれらのかたちを imperfect としてみなかったのだろうか。彼は、ここで perfect と pluperfect のなりたちを動名詞と動詞 wung 「いる」とが結合したかたちであると説明している。tutang とおなじ論理ですすめていけば、imperfect になるはずだが、彼はそうしなかった。チェンバレンは、perfect と pluperfect のつけたしのところでつぎのようにのべている。「琉球語が perfect を採用するところを、日本語ではたいていのばあい、ふつうの past (形のうえでは琉球語の imperfect に相当する) が好んでもちいられる。たとえば、“The sun has risen” を、琉球語では Tída nu agatóng (perfect)、日本語では Hi ga agatta (imperfect) のように。」ここにわたしたちは、彼が、tutóng を perfect と判断し、tutótang を pluperfect と判断した根拠をみることができる。彼が用例にあげた agatóng のばあいは、首里方言では《たんなる状態》をあらわしていて、たしかにこのようなばあいは、perfect の形式をもちいることができる、英語の用法に照応する。しかし tutóng と tutótang のばあいには照応しない。なぜなら首里方言の動作動詞があらわすアスペクトの意味は変化動詞のあらわすそれとはことなっているからである。つまり首里方言では変化動詞が《変化の結果の継続》あるいは《変化の結果の状態》をあらわすのに対して、動作動詞は《動作の継続》をあらわす。そうであるのに、彼は変化動詞のアスペクトの意味を一般化して、動作動詞にもあてはめたのである。このことは、動作動詞と変化動詞とを区別しなかったことからおこって

きた問題である。ベッテルハイムはこれらのかたちをひとくくりにして過去としている。Tskoténgに‘made’の訳をあて、Tskotetang, Tskotótangに‘hade made’の訳をあてているところからすると、ベッテルハイムもチェンバレンとおなじような理解をしていた、とみていいだろう。彼のばあいは、注でTskoténgがTskotóngの“plus quam perf.”とおなじ意味でももちいられる、とのべているところから、おそらくTskotóng, TskotótangとTskoténg, Tskotêtangとの意味のちがいをしらべることができなくて、過去形としてひとまとめにしたのだろう。

前期(2) 1940年代

§ 3. チェンバレンのあとをついでいるとみられるものに那覇方言を対象にした金城朝永 1944 がある。この論文における動詞の活用の一覧表では、「時」を現在・過去・完了・過去完了のよつちにわけている。そのなかから終止形をぬきだしてしめせば、つぎのようになる(語例の基本形はkacuN「かく」)。

現 在	kacuN	過 去	kacaN, kacutaN
		完 了	kace:N, kaco:N
		過去完了	kace:taN, kaco:taN

ここで問題になるのはkaco:Nとkaco:taNの位置づけである。この、ふたつのかたちはチェンバレンがperfectとpluperfectとしてとらえたものであって、それが彼の誤解にもとづくものであることはさきに指摘したとおりだが、金城はそのあやまちをそのままうけついでいる。金城のもうひとつの問題点は、「過去」にkacaNとkacutaNとをならべながら、そのちがいを説明していないことである。そのちがいについてはあとで検討することにしよう。

後期(1) 1960年代

§ 4. 日本語動詞の研究においてテンスとアスペクトとを区別して、動詞のアスペクトの問題を前面にだしたのは佐久間鼎『現代日本語の表現と語法』(1936)

であり、アスペクトをはじめて形態論的にあつかったのは宮田幸一『日本語文法の輪郭』(1948)で、今世紀後半のアスペクト研究の出発点になっているのが金田一春彦 1950「国語動詞の一分類」、1955「日本語動詞のテンスとアスペクト」であるという⁹⁾。鈴木重幸 1957「日本語動詞のすがた(アスペクト)について」、1958「日本語動詞のとき(テンス)とすがた」などはそのあとにつづく。標準語の動詞のアスペクト研究の成果は琉球方言の動詞の研究にもとりいれられた。これまでの琉球方言の研究者たちが、動詞をアスペクトの観点からとりあげてこなかったのに対して、鈴木 1960 は、形態論的なカテゴリーとしてのアスペクトをとりあげて、その体系をさしだした。このあとに上村 1963 がつづいている。ふたつの論文では、テンスとアスペクトとを区別して、あたえられたかたちをテンスの観点とアスペクトの観点とから分析している。一覧表のまとめ方は両者ともことになっているが、あたえられたかたちが「いきり・断定・みとめ・普通体」で統一され、テンス・アスペクトでおたがいに対立する、という見方は一致している。上村にあわせて両者のパラタイムをつぎにあげよう(語例の基本形はjunuN「よむ」)。

鈴木 1960

基本態

現在形	'junuN
過去完了形	'judaN
未完了過去形	'junutaN

持続態

現在形	'judooN
過去形	'judootaN

結果態

現在形	'judeeN
過去形	'judeetaN

上村 1963

	現 在	過 去	
		単純	'judaN
普通態	'junuN	継続	'junutaN
持続態	'judooN	'judootaN	
結果態	'judeeN	'judeetaN	

鈴木・上村は、学校文法のように、語尾の -aN と -taN とを「時の助動詞」としてきりはなさずに、'judaN, 'junutaN, 'judootaN …… をひとつの文法的なかたちとしてとらえ、それらの文法的な意味をシステムのなかでとらえて、琉球方言におけるアスペクトを記述した。鈴木ではアスペクトの意味の説明がかけているのに対して、上村では〈普通態〉の説明はかけているが、その他のアスペクトにはおおまかな説明があたえられている。アスペクトというあたらしい側面がとりだされているとはいえ、両者は、1960年代の日本語のアスペクト研究がかかえていた問題をそのままもっている、と同時に琉球方言がもつ独自のアスペクトの問題ももっている。

1) junuN のテンス・アスペクトの問題点

鈴木・上村のふたつの論文では 'junuN を、鈴木が〈基本態〉とよんでいるのに対して、上村は〈普通態〉とよんでいる。彼らは、?aN「ある」と'uN「いる」とには持続態と結果態がかけている、とのべている。この記述からすれば、存在動詞にもアスペクトがあるということになる。このことは、'junuN がアスペクトの面で 'judo:N や 'jude:N に対立するものとしてあつかわれていない、ということをしめしている。両者は、そのために 'junuN のもつアスペクチュアルな意味をとりだすことができなかった。この問題については、すでに奥田靖雄が「アスペクトの研究をめぐって」(1977) のなかで指摘している。鈴木は「首里方言の動詞のいいきりの形」の論文のまえに「日本語の動詞のア

スペクトについて」(1957)をかいていて、この論文とおなじ考え方で首里方言のアスペクトを研究していたのである。そのあとで57年論文におけるアスペクトの問題を奥田に指摘されたということになる。奥田 1977 は、金田一春彦らの動詞の分類のし方を批判しながら、彼らが「suru と shite-iru とをアスペクチュアルな〈つい〉」としてあつかっていないことを指摘している。そのなかで奥田は、動詞を《動作動詞》《変化動詞》《状態動詞》にわけ、《動作動詞》と《変化動詞》において suru と shite-iru とのアスペクチュアルな対立があらさまにあらわれてくることを指摘した。さらに論をすすめて、suru は／ひとまとまりの動作をあらわす／かたちであり、shite-iru は《動作動詞》のばあい／動作の継続／をあらわし、《変化動詞》のばあい／変化の結果の継続／をあらわすかたちであることを指摘し、suru に《完成相》、shite-iru に《継続相》というなまえをあたえている。

テンスの観点からいえば、ベッテルハイムとおなじように、鈴木・上村は 'junuN を「現在」としてあつかっている。鈴木は〈現在形〉のところで「未来の動作、特定の時間にかかわりのない動作を表わすほかに、現在の動作を表わすことができる」とのべている。上村が指摘しているように、'junuN は出発点においては「現在」をあらわしていたが、そのあと「未来」へ移行している。そうであれば、このかたちのあらわすテンスは／現在・未来／であって、「現在形」とするのは正確ではないだろう。

2) 'judaN と 'junutaN のアスペクトの問題点

過去をあらわす、'judaN と 'junutaN を、鈴木は「完了過去形」と「未完了過去形」とよび、上村は「単純過去」と「継続過去」とよんでいる。鈴木および方はロシア語の、完了体と訳されている *совершенный вид* と不完了体と訳されている *несовершенный вид* を連想させ、上村のよび方はフランス語の、単純過去 *Passé simple* と *Imparfait* を連想させる。両者は、ふたつのかたちがあらわすアスペクトの意味を、国際的な用語法でいえば、perfective と imperfect との対立としてとらえているようにみえる。しかし彼らがそれにあてた用語には問題がのこる。鈴木についていえば、彼はこのふた

つのかたちがあらわすアスペクトの意味を説明してはいないのだが、'junutaN に imperfect の特徴をみいだして「未完了過去」とよんだとすれば、彼のいう「持続態」のかたちもその意味特徴をもっているので、'judootaN も 'junutaN とおなじなかまにいなければならない。上村のばあいは、'judaN のあらわすアスペクトの意味はのべていないが、'junutaN の意味は「過去の一定時において継続または反復していた動作や、過去の習慣などを表わす」とのべている。そうであれば、「継続」をあらわさない 'judaN と「継続」をあらわす 'junutaN とを、「普通態」としておなじわくにおさめることはできない。いっぽう 'judo:N のアスペクトの意味を「動作・変化がすでに完了して現在にいたっていることと、動作・変化が継続または反復されて現在も続いていることの二通りを意味する」とのべて、「持続態」とよんでいる。そうであれば、'junutaN と 'judo:taN とは「継続」という特徴をもっているので、'judootaN も 'junutaN とおなじなかまにはいなければならない。いずれにしても、両者がこれらのかたちにあたえた用語はアスペクチュアルな基本的な意味特徴を正確にあらわしていない、ということになる。これは、'judaN と 'junutaN とが perfective と imperfective とによって対立しているにもかかわらず、彼らが、ふたつのかたちを「基本態」または「普通態」で統一される、ひとつのアスペクトととらえ、'judaN を、'junutaN にアスペクティックに対立するかたちとしてあつかわなかったことからおこってきた問題である。なお、上村が 'junutaN, 'judooN, 'judeeN においてとりだしたアスペクトの意味は、このあとの琉球方言の動詞のアスペクト研究にひきつがれていく。

後期(2) 1980年代以降

§ 5. さきにのべたように、奥田靖雄の、日本語のアスペクト論に関する一連の論文によって日本語のアスペクト論の研究はあたらしい段階にはいっていきののだが、その成果は琉球方言のテンス・アスペクトの研究にもとりいれられた。津波古敏子「不完成相につきまとう臨場性－首里方言のばあい－」（『ことばの科学 2』1989）は、奥田のテンス・アスペクトの理論に依拠しながらまとめられたものであるが、この論文では、奥田の用語をもちいて、首里方言のテンス・

アスペクトのかたちがつぎのようなパラダイムでさしだされている。

	完 成 相	継 続 相	結 果 相
現在・未来	numuN のむ	第一 nudo:N のんでいる	nude:N のんである
過 去	nudaN のんだ	第一 nudo:taN のんでいた 第二 numutaN ノミヨッタ	nude:taN のんであった

鈴木・上村とのちがいは、テンスの面では、numuNを、彼らが「現在形」とよんだのに対して、この論文では「現在・未来」形としていることであり、アスペクトの面では、鈴木・上村論文の、「基本態」／「普通態」を「完成相」とよび、「持続態」は「継続相」、「結果態」は「結果相」とよんでいることである。もうひとつのちがいは、numutaNが、鈴木・上村論文では「基本態」／「普通態」に位置づけられているのに対して、ここでは「継続相」に位置づけられていることである。

この論文では、奥田の理論にしたがってアスペクトを「あたえられた動詞にさしだされる動作が、みずからの時間的な内部構造の、どの局面で、どのモメントで他の動作と接触するかという観点から、動作にあたえられた時間的な評価である」とみている。この観点から、首里方言のアスペクトをあらわすかたちはみつつにわけられている。ここでは《ひとまとまり性》と《限界の到達》というアスペクチュアルな意味によって、numuNとnudaNとが「完成相」としてひとつにまとめられ、《動作の継続》《変化の結果の継続》《動作・変化の過程》というアスペクトの意味によって、nudo:N, nudo:taNとnumutaNとが「継続相」としてひとつにまとめられている。そして動作の時間が過去とはなしのモメントとの両方にまたがっていて、過去には動作が、はなしのモメントには《動作の結果的な状態》が存在する、《結果性》によって、nude:N, nude:taNが「結果相」としてひとつにまとめられている。奥田 1977 にまなで、この論文では、動詞を《動作動詞》と《変化動詞》とにわけてアスペク

トの意味をしらべている。そして《動作動詞》と《変化動詞》は、標準語のばあいとおなじように、「継続相」 nudo:N, nudo:taN においてはことなるアスペクトの意味をあらわし、また《変化動詞》は結果相の意味をあらわすことができないことを指摘している。nudo:N, nudo:taN にアスペクチュアルな意味がふたつあることについては上村も指摘している。津波古の論文は、不完成相にそなわっている《臨場性》を追求することがテーマになっていて、継続相の過去に位置づけた、第一継続相の nudo:taN と第二継続相の numutaN とのちがいをあきらかにすることを目的としている。そのなかで《過程性》というアスペクチュアルな意味をもつ numutaN には《臨場性》（《目撃性》）がつきまわっていて、そこに《証言性》というモーダルな意味もつけくわわってくることを指摘している。この論文では、注のところで「numutaN を『進行相』とよんでもいいだろう」とのべて、積極的に numutaN を「進行相」とよぶことをせず、nudo:taN と numutaN とを不完成相としてまとめている。これに対して、津波古敏子「琉球列島の言語（沖縄中南部方言）」（『言語学大辞典第4巻 世界言語編 下-2』（1992））では、つぎのように、完成相（perfective）、不完成相（imperfective）、結果相（perfect）にわけ、さらに、不完成相を、継続相（durative）と進行相（progressive）とにわけている。

アスペクト	テ シ ス	
	（現在・未来）	（過 去）
完成相	kanuN 「たべる」	kadaN 「たべた」
不完成相		
継続相	kado:N 「たべている」	kado:taN 「たべていた」
進行相	—————	kanutaN 「タベヨッタ」
結果相	kade:N 「たべてある」	kade:taN 「たべてあった」

ここでは、numutaN がもっている、《過程性》と《臨場性》（《目撃性》）という、進行相の特徴を前面にだして、このかたちを「進行相」として独立させている。

しかしながら、ふたつの論文ともテンスの側面からの説明がなされていない。

§ 6. 首里方言以外に、形態論的なちばから動詞を記述したものに狩俣繁久・島袋幸子の「今帰仁方言の動詞の文法的なカテゴリー ―アスペクトとヴォイス―」(『言葉の科学2』1989)がある。この論文は琉球方言におけるアスペクトとヴォイスとの全体的なすがたをとらえようとしたもので、ここでは、今帰仁方言のアスペクトとヴォイスを標準語のそれと比較しながら記述している。学校文法にあてはめて方言の文法的なかたちをしめすだけの方法とはちがって、彼らは、アスペクトとヴォイスの基本的な意味と派生的な意味をしらべて、たんねんに記述している。この論文では、今帰仁方言のアスペクトがつぎのようなパラダイムでさしだされている。

	すぎさらず	すぎさり
完成相	numiN (のむ)	nudaN (のんだ)
進行相	numiN (のむ)	numi:t'aN (のんでいた)
継続相	nuduN (のんでいる)	nuduit'aN (のんでいた)
痕跡相	nudeN (のんである)	nude:t'aN (のんであった)
反復相	nudattɬ'uN (のんでいる)	nudattɬ'ut'aN (のんでいた)

この論文の著者たちは、奥田の理論と上村・鈴木の論文にまなびながら、今帰仁方言のアスペクトをまとめていて、とくに「痕跡相」と「進行相」とについてはくわしく説明している。ここでは、首里方言の「結果相」に対応するかたちを「痕跡相」とよんでいる。「進行相」についていえば、この論文では、「動きや変化がアクチュアルに進行している」というアスペクトの意味をとらえ、他のかたちと対等な関係で位置づけている。ここで目につくのは、numiNを「完成相」と「進行相」のホモニムとしてあつかって、両方に配置していることである。このかたちに対応する首里方言のnumuNは完成相へ移行しているのだが、今帰仁方言では進行相の意味をたもちつつ完成相へ移行しつつある。ここにこのかたちの位置づけのむつかしさがあるのだが、歴史的な観点からす

れば、ホモニムとするあつかいには問題がのこるだろう。今帰仁方言の *nudeN*, *nude:t'aN* は、首里方言の *nude:N*, *nude:taN* に対応している。首里方言のばあい、このかたちをあらわすアスペクトの意味を、上村は「動作が完了していてその結果が現在残存していることを示す」ととらえている。上村も津波古もアスペクトの意味を《動作の結果》としてとらえているのに対して、彼らは、鈴木重幸『日本語文法・形態論』(1972)における標準語の「シテアル」の記述にまなびながら、*nudeN*, *nude:t'aN* のアスペクトの意味を動作の結果の痕跡にもとめている。彼らは、今帰仁方言の動詞が痕跡相のかたちをとるとき、「はたらきかけた動作の主体がそのまま主語になり、動作の主体が問題にされるのである。標準語のシテアルの形を述語にもつ文にみられるたちば的な側面は、今帰仁方言では痕跡相を述語にもつ文の構造にはみられない」とのべて、標準語とはことなる構造になることを指摘している。ここまでは今帰仁方言の特徴としてみとめることができる。彼らはこのあとにつづけて、「他動詞の痕跡相が述語になる文では、動作の主体が明示されるのが普通であり、主体の動作と客体の変化の結果を同時に表現する。そのばあい、主体の動作が客体を変化させて、その変化が客体にのこされていることをあらわすのであって、主体そのものに結果がのこることをあらわすのではない。その点では標準語のシテアルを述語にもつ文の構造にちかく、今帰仁方言の痕跡相を述語にもつ他動詞構造の文は、二重構造をなしているといえそうである」とのべて、つぎの例をあげている。

[tara:ga	hubine:	ji:	hak'it'eN.
太郎が	壁に	絵を	かけてある。
動作の主体		動作の客体	
		変化の主体	変化の結果

ここで彼らは「主体の動作の結果＝痕跡がその動作に間接的にかかわったものにのこっている」として、はたらきかけをうける対象の側から痕跡相の二重構造を説明しているのだが、彼らのとらえ方には問題がふたつあるだろう。ひと

つは、動作の客体を問題にして、動詞のかたちが何をあらわすかについては問題にしていないことである。つまり、彼らは、補語が「動作の客体」をあらわすとき、述語の動詞 hak'it'eN が何をあらわすかについては何もかたっていないのである。ふたつめの問題は、文の構造のなかにおける補語と述語との、意味の関係のとらえ方である。彼らはここで、補語は「動作の客体」でもあり、「変化の主体」でもある、ととらえているのだが、動作の主体が主語でしめされる構造のなかでは、《変化をうける対象》は補語の位置にくることができるが、「変化の主体」は補語の位置にくることができない。「変化の主体」であることをしめすときには、彼らが標準語の「シテアル」に照応するばあいの例としてあげた、うけみの構造をとらなければならない。そうであれば、「動作の主体」が主語になっているこの文では、述語の動詞は、《動作の結果》をあらわし、まだ《動作性》をたもっていて、「変化の結果」をあらわしてはいない。もし述語の動作が「変化の結果」へ移行しているとみるとすれば、「動作の主体が問題にされる」という、彼らのさきの指摘と矛盾する。とすれば、hak'it'eN のかたちを述語にもつ文のタイプが「二重構造」をもつ、という見方はなりたたなくなるだろう。この論文では、さらにこのあと痕跡相のかたちは変化動詞や存在動詞のばあいにも痕跡をあらわすことができる、とのべている。そうであれば、今帰仁方言の「痕跡相」はアスペクトをあらわすかたちであるとみるわけにはいかなくなる。ところがおなじ今帰仁方言のアスペクトが、島袋幸子「琉球列島の言語（沖縄北部方言）」（『言語学大辞典第4巻 世界言語編 下-2』1992）では、つぎのようにまとめられている。

	《すぎさらず》	《すぎさり》
完成相	numiN「のむ」	nudaN「のんだ」
継続相	nuduN「のんでいる」	nuduit'aN「のんでいた」
結果相	nudeN「ののである」	nude:t'aN「のんであった」
終結相	nudi ne:N「のんでしまう」	nudi ne:Nt'aN「のんでしまった」
反復相	nudaQc'uN「のんでいる」	nudaQc'ut'aN「のんでいた」

さきの論文の「痕跡相」がここでは「結果相」とよびかえられている。アスペクトの意味を説明していないので、ここでは検討することができないが、もし「結果相」であれば、変化動詞や存在動詞にも「痕跡相」のかたちをみとめた、さきの論文では存在動詞にもアスペクトの意味をもとめた、鈴木・上村の問題がそのままひきつがれていることになる。さきの論文をよむかぎり、今帰仁方言の変化動詞や存在動詞がこのかたちをとるときは、首里方言とおなじように、アスペクチュアルな意味はあらわさず、再確認とか発見、あるいは《おしはかり》などのモーダルな意味を表現している、とみていいだろう。

「進行相」の位置づけもさきの論文とことになっている。あとの論文ではさきの「進行相」の numi:t'aN がアスペクトからはずされて、テンスのところでつぎのように位置づけられている。

	[すぎさらず]		[すぎさり]
	現在・未来形	単純過去形	報告過去形
のべたて法 断定 1	numiN	nudaN	numi:t'aN
	(以下省略)		

ここでは、進行相から完成相への移行の途中にある numiN の問題を解決するために、さきの論文で「完成相」に位置づけた numiN と「進行相」に位置づけた numiN とをひとつのかたちとしてあつかって、nudaN と numi:t'aN とをひとつのわくにまとめている。ここでのまとめ方は、どちらかという、上村論文にちかい。この表では、numiN と nudaN、numi:t'aN とはテンスでは対立しているが、アスペクトでは対立していないことをしめしている。つまり numiN, nudaN, numi:t'aN のみつつのかたちはおなじアスペクトの意味をあらわすことをしめしている。なぜなら「単純過去」も「報告過去」もアスペクトの意味をあらわす用語ではないからである。そうであれば、この論文では numi:t'aN のアスペクトの意味をきりすてたことになるだろう。

宮古方言と八重山方言におけるテンス・アスペクトの研究は、首里方言や今帰仁方言のようにはすすんでいない。これらの方言におけるテンス・アスペク

トは、今帰仁方言とおなじ方法でまとめられた、狩俣繁久の「琉球列島の言語(宮古方言・八重山方言)」(『言語学大辞典第4巻 世界言語編 下-2』1992)によって、おおよそのことはしることができるが、くわしい記述がないので、ここで検討の対象にすることができない。研究成果のくわしい報告がまたれる。

これまでみてきたように、琉球方言のテンス・アスペクトの研究は、標準語の動詞のテンス・アスペクトの研究の影響をうけて、先達の研究がかかえるよわい部分を克服しながらすすんできた。わたしのこの論文では、これらの論文においてわたしが問題とかがえる点をあげてきたが、この確認はこれからの調査研究をすすめるうえでさてとおれないことであって、琉球方言の研究にとっては、そのことによってこれらの論文の価値が左右されることのないのはいうまでもないことである。

あとがき

わたしのこの論文では、首里方言の numutaN とそれに対応する今帰仁方言のかたちを進行相としてとらえるたちばにたって、このかたちを検討している。このかたちは、これまでみてきたように、研究者によって位置づけがことなっている。ということは、numutaN がいろいろな問題をもったかたちであることを暗示しているのだろう。これからあと、あたらしい視点でのとらえ方がでてくるかもしれない。もしこのかたちがアスペクトをあらわすかたちではないとなれば、わたしがこの論文でのべたことは訂正されなければならないだろう。

この論文をまとめるにあたって、奥田靖雄先生から多大な学恩をうけた。ふじゅうぶんな理解や誤解があれば、それはすべてわたしの責任である。なお「動詞の終止形(その2)」の草稿をいただいたが、時間的な余裕がなくてここにいかすことができなかったことを記して、あわせて感謝の念をあらわしたいと思う。

〔 注 〕

- 1) ここでは、伊波和正ら4人が、大英博物館に所蔵されている原本を解読して活字化し、BULLETIN of Department of English, OKINAWA KOKUSAI UNIVERSITY (Vol.8 No.1, 1983)に掲載した資料を検討の対象にした。
- 2) 鈴木重幸「『ことばの科学』第6集の発行にあたって」(『ことばの科学6』p9)
- 3) チェンバレンが“POSITIVE VOICE”とよんでいるのを、ここでは肯定を意味するものとして検討の対象にした。
- 4) 高橋太郎「解説 日本語動詞のアスペクト研究小史」(金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』1976)

〔 参考文献 〕

- 奥田靖雄 1977「アスペクトの研究をめぐって—金田一阶段—」(宮城教育大学『国語国文 8』・奥田 1985 に所収)
1978「アスペクトの研究をめぐって」(『教育国語』53,54)
1985『ことばの研究・序説』(むぎ書房)
1988「時間の表現(1)(2)」(『教育国語』94,95)
1992『日本語動詞の研究 動詞論』(北京外国語学院での講義用テキスト)
1993「動詞の終止形(その1)」(『教育国語』2・9)
1993「動詞の終止形(その2)」(草稿)
- 金田一春彦編 1976『日本語動詞のアスペクト』(むぎ書房)
- 鈴木重幸 1993「『ことばの科学』第6集の発行にあたって」(『ことばの科学6』)
- 高橋太郎 1976「解説 日本語動詞のアスペクト研究小史」(金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』)
- バーナード・コムリー 1976『アスペクト』(山田小枝訳、むぎ書房、1988)
- ユー・エス・マスロフ 1984『アスペクト論』